



防災訓練には積極的に参加を

陸上自衛隊久居駐屯地
お お た としゆき
太田 智之 3等陸曹

第4中隊の第2派として、孤立地域の住民の救助および被災地の住民の捜索任務を行いました。

孤立地域の現場につくと、安否確認や捜索を行い、車や重機も入れないので、ひたすら呼びかけながら捜索を行いました。また、被救助者を運ぶ任務では、暗闇の中、道なき道を進み、気づけば下山しているということもありました。私自身、災害派遣は紀伊半島大水害が初めてで、現場の重い空気を肌で感じました。

みなさんをお願いしたいことは、防災訓練には、できるだけ参加してほしいということです。訓練をすることで災害が起きた際に、その経験が活きてきます。また、被災したら、スマホで情報収集しようとする人が多いのですが、災害時は使えないことが多いので、防災ハンドブックを用意しておくことが大切です。

自衛隊の記憶

町内で109人の人命救助を行った陸上自衛隊。ここでは10年前、町内で救助・捜索を行った4人の方にお話をお伺いしました。

第3中隊の分隊長として、人員の捜索や安否確認を行いました。

私が被災地に入ったときには、水が引いており、橋の上に木や枝が乗っていたり、車が縦に立っていたりと悲惨な現場を目の当たりにしました。

印象的だったことは、住民の安否確認を行う際に、区長が住民の顔と名前が一致しているため、容易に進んだことです。改めて、災害時の横のつながりの重要性を感じました。

災害は、いつ、どこで起きるかわかりません。日ごろの備えとして、防災グッズや家族同士の安否確認方法など、準備しておくことが大切です。また、日ごろから横のつながりを作っておいてください。いざというときや困ったときの助けになります。



横のつながりを大切に

陸上自衛隊久居駐屯地
つじ けいすけ
辻 啓介 3等陸曹

自然を甘く見ないでほしい



陸上自衛隊久居駐屯地
よしだ しずお
吉田 静雄 陸曹長

第4中隊の第1派として、当初は、被災地の現地確認や経路偵察、夜間避難できていない方の再確認などを行い、その後、食料や水を配ったりする支援をメインに行いました。

被災地では、浸水により道路と川の境界がわからないので、どのように行動し、どこから手をつければいいのか判断に迷うことがありました。また、被救助者を搬送するにも、車が入れないため、人の手で運ぶしかないという状態で、機動力が失われるため大変でした。

災害派遣で感じることは、自然を甘く見ないでほしいということです。この程度なら問題ないと思うと取り返しがつかなくなります。命があれば何とでもなります。少しでも不安を感じたら、最優先で自分の命を守る行動をとってください。

第3中隊の分隊長として、川沿いの民家の安否確認をメインに行いました。私たちが行ったときには、水が引いている状況だったので、特に水に入ることとはなく、各民家一軒一軒を徒歩で周り、住民の人の安否を確認するという任務を行いました。

被災地に着き、車から降りたときの景色を今でも覚えています。水が引いた状態だったので、民家や壁などに水位のあとが残っており、改めて、台風第12号の被害の大きさを知り、衝撃を受けました。

みなさんには、日ごろの準備として、ハザードマップを確認し、危険な場所や、避難場所をしっかりと確認してください。そして、自分の住む地域に愛着を持ってください。自分たちの地域は自分たちで守るという意識を持つことが大切です。

自分が住む地域に愛着を



陸上自衛隊久居駐屯地
やまもと かんた
山本 貴太 3等陸曹



最優先に
命を守る行動を

元紀宝町消防団団長
も り かい おさむ
向井 治 さん

私は災害当時、消防団の団長を務め、台風第12号の対応を行いました。消防団としての最初の活動は、河川警戒や避難誘導、救助活動でした。その後は328日間にわたり、捜索活動などを行い、多くの消防団員が尽力してくれました。

大きな災害があった場合は、身近なところから救助の輪を広げていってほしいと思います。ただ、まずは、自分の身を守る行動を最優先に考えてください。

そして、みなさんに伝えたことは、前もって避難することの大切さです。無駄足になってもいいので、避難してください。また、家族と「どこに逃げるか」話す機会を作り、いざというときに動けるようにしておいてください。



01. 大里永田地区で川の氾濫状況を確認する町職員と消防団員。02・03. 消防団による復旧活動。



消防団として
地域防災力の向上を

紀宝町消防団団長
お う の とういち
逢野 統一 さん

災害当時、第2分団鮎田班の部長として、鮎田を重点的に警備していました。鮎田水門付近で交通整理をしていましたが、夜に熊野川の水が増えてきて、ものすごいスピードでいきなり水門を乗り越えたときには「もう駄目だ」と思い、消防団も高台に避難しました。今までに経験したことのないことで、あのときの恐怖感は忘れられません。

紀伊半島大水害の教訓を受け、消防団として、地域住民への避難の呼びかけやパトロールをもっと重点的に行う必要性を感じました。今後は、自分の町は自分で守る意識を持ち、消防団として、地域防災力の充実・強化を図っていきたいと考えています。災害はいつ来るかわかりません。みなさんも消防団員に加入していただき、一緒に町を守りましょう。

事前にできること、
備えられることは備える

熊野市消防署紀宝分署
お ざ き こう
尾崎 剛 分隊長



した。2階の窓や屋根から高齢の人をボートに乗せる活動は転落などの危険が高く、時間を要する活動となりました。

日付が変わると大通寺が浸水を始め避難する必要があり、山道を通って御船浄水場まで徒歩で避難することになります。70人ほどの避難者の中には足の不自由な人も多く、歩けない人は背負っての移動となりました。険しい山道である上に、小石を含んだ滝のような濁水が流れ、いつ土砂崩れが発生するか分からない状況でしたが、午前5時ごろには全員を浄水場まで届けることができました。それでも全員を救助できたのか確証が持てず大変不安でした。

救助や避難活動には危険が伴います。子どもや高齢者のいる家庭、ペットを飼われている家庭での救助避難活動は更に困難となります。ぜひ、早い避難を心がけてください。

また救助活動時、浮いた家具や割れた食器等が活動の妨げになることが多くありました。地震対策の家具固定は水害時にも有効です。ぜひ設置をお願いします。